

日本英文学会東北支部 第75回大会資料

日本英文学会東北支部第75回大会は
本支部ホームページ(<http://www.elsj.org/tohoku/>)にて
ウェブカンファレンスで開催いたします。

開催期間: 2020年11月21日(土)～27日(金)

日本英文学会東北支部事務局

〒980-0845 仙台市青葉区荒巻字青葉149

宮城教育大学 英語教育講座 竹森徹士研究室内

電話: 022-214-3496 / E-mail: tohoku@elsj.org

日本英文学会東北支部

2020年度 大会役員一覧（敬称略）

支 部 長	大河内 昌						
副 支 部 長	川田 潤						
理 事	大西 洋一	奥野 浩子	金子 淳	金子 義明			
	境野 直樹	佐々木 和貴	鈴木 亨	鈴木 雅之			
	竹森 徹士	村上 東					(五十音順)
大会準備委員	小林 亜希	三枝 和彦	村上 東				
	近藤 亮一	西牧 和也					
開催校委員	川田 潤						
事務局	竹森 徹士 (事務局長)		島 越郎 (事務局長補佐)				
	酒井 祐輔 (事務局員)						

日本英文学会東北支部第 75 回大会プログラム

日本英文学会東北支部第 75 回大会は、本支部ホームページ(<http://www.elsj.org/tohoku/>)にてウェブカンファレンスで開催いたします。

開催期間は 2020 年 11 月 21 日（土）から 27 日（金）までです。期間中は本支部ホームページに大会ページが設けられますので、各研究発表ファイルをご覧いただいたり、発表に対する質問やコメント等をお寄せいただいたりすることが可能となります。

皆様のご参加を心よりお待ちしております。

研究発表

英米文学部門

1. 「対立こそ真の友情」か？—*Island* (1962) にみる不均衡としての非武装

東北学院大学大学院 高城 翔平

英語学部門

1. 形容詞残置名詞省略に対するカートグラフィー分析

東北大学大学院 鈴木 舞彩

2. 決定詞付きの自由関係節の派生について

東北大学大学院 平塚 哲郎

3. ラベル付けアルゴリズムに基づく副詞効果の考察

東北大学大学院 柳澤 國雄

研 究 発 表

英米文学部門

「対立こそ真の友情」か？—*Island* (1962) にみる不均衡としての非武装

東北学院大学大学院 高城 翔平

Aldous Huxley (1894-1963) の生涯最後の長編小説である *Island* (1962) は、インド洋上の架空の島、西洋と東洋の最善の融合を目指した国、Pala を舞台としたユートピア物語である。本文では西洋と東洋の結合の試みを Blake の描いた “a marriage between hell and heaven” と喩えている。William Blake (1757-1827) の詩のタイトル *The Marriage of Heaven and Hell* (1790-93) との微妙な表現の差異は、この詩の主旨が少し変形されて *Island* の作品世界に適用されていることを暗示してはいないだろうか。

本発表では、*The Marriage* を土台に *Island* に見られる対立関係の均衡と不均衡、特に Pala の非武装主義とその結果としての傾覆について考察する。Pala の非武装は改革以前からの東洋的宗教観に由来する。本文でこれと対立するのは西洋の科学を取り入れた軍事政権の隣国 Rendang である。武装—非武装の両極にあるこれらの国は、言葉の上では対立するが現実では全く拮抗し得ない。Pala の持つ力、精神の力は、Rendang に一切働きかけることがなく、Pala は滅ぶ。彼らは正しく対立すべきだっただろうか。しかし何に対して、何によって対立すべきなのか。この点を考察していきたい。

英語学部門

形容詞残置名詞省略に対するカートグラフィー分析

東北大学大学院 鈴木 舞彩

本発表は、形容詞が対比焦点と情報焦点どちらを受けた場合もその前置が可能であるが、対比焦点の場合のみ形容詞残置名詞省略が許されるという事実に対して理論的説明を与えることを目標とする。具体的には、カートグラフィー分析を名詞句に適用し、DP 内に2つの異なる焦点位置が存在すると論じる。これにより、形容詞が対比焦点と情報焦点を受けどちらの場合も前置できるという事実が説明される。この考えに Tanaka (2011) による修飾関係が同一の転送領域内で形成されるという仮定を組み合わせて、形容詞が対比焦点を受ける場合には名詞との修飾関係を形成できるため形容詞残置名詞省略が許されるのに対して、情報焦点を受ける場合にはそれができないため形容詞残置名詞省略が許されないと主張する。本発表の分析の帰結として、名詞句内省略において PP が付加部であれば残置でき、補部であれば残置できないという事実も説明できることを示す。

決定詞付きの自由関係節の派生について

東北大学大学院 平塚 哲郎

決定詞付きの自由関係節 (DHFR)とは、自由関係節に決定詞がついた文である。Nakamura (2009)では、DHFRは制限的關係節と同様の構造を有すると仮定されており、*what*が*wh-*と*-at*に分解され、NPである*-at*がDHFRの主要部として繰り上がると分析されている。NakamuraはDHFRが名詞句主要部(*-at*)を有するため多重關係節を形成できると主張しているが、実際には多重關係節の形成は不可能である。この事実に基づき、本発表では*what*を分解するというNakamuraの分析に反論し、定性が未指定の*what*がCP指定部に移動し、決定詞と併合することでDHFRが派生するというより単純な分析を提案する。この分析を用いて、DHFRが示す定性の不一致や多重關係節と先行詞内削除の可否に対して説明を与える。

ラベル付けアルゴリズムに基づく副詞効果の考察

東北大学大学院 柳澤 國雄

動詞句補部である*that*節内からの目的語の抜き出しは補文標識*that*の有無にかかわらず可能であるが、主語の抜き出しは*that*が非頭在的であるときのみ可能である。一方、副詞の介在がその非文法性を回復させることが観察されている。本発表は、副詞効果の文法性をラベル付けアルゴリズムの観点から説明する。それに際し、TP指定部の副詞句は‘弱い’Tの強化が可能であること、素性の一致の可否に応じて素性継承の適用の有無が決定されることを仮定する。副詞効果は、TP指定部の副詞句がTを強化し、*wh*主語が直接CP指定部へ移動するために起こると分析する。TP指定部に解釈可能な φ 素性をもつ要素が存在しないため、CからTへの素性継承は起きず、Cの解釈不可能素性はCの指定部-主要部の関係下において値付けされる。これにより派生は正しく収束する。また本分析は場所句倒置の派生についても適用可能であることも論じる。